

<随想>啄木と万年山宝徳寺の因縁

遊座, 昭吾 / ユウザ, ショウゴ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

54

(開始ページ / Start Page)

100

(終了ページ / End Page)

101

(発行年 / Year)

1996-07-13

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019899>

啄木と万年山宝徳寺の因縁

遊座 昭吾

山号万年山、寺号宝徳寺。その累代住職は、十四世遊座徳英、十五世石川一禎、そして十六世遊座芳筈、十七世遊座芳夫であった。徳英は私の祖父、一禎は啄木の父、芳筈、芳夫は私の父、兄。万年山の裾に建つ「歴住塔」に、いま累代住職の霊が静かに眠っている。現十八世芳章は私の甥。

宝徳寺は万治元年（一六五八）、盛岡の名刹曹洞宗瑞鳩峰山報恩寺九世蘭翁嫩芝大和尚により、その末寺として北岩手郡洪民村（現玉山村）に開山された。寺の明細帳には、「万年山ノ万ノ字年号万字ヲ取り蘭翁徳高ク以テ宝徳寺号ナリ」とあり、山号寺号の由来が語られている。

この寺に、啄木は明治期に満一歳から十八歳まで育ち、私は昭和

期に生まれ、育った。いま住まいは盛岡だが、本籍地は移していない。時代は違っても、啄木と私は同じ寺という雲境空間に呼吸し、育った。この万年山宝徳寺の因縁を、心に宿したからである。しかし、その時は大学を出た後、しばらく経つてのことである。

大学では、近藤忠義先生の近世文学ゼミ、片岡良一先生の漱石ゼミをとった。戦後とは言え、一九五〇年六月朝鮮戦争勃発、都学連がレッドパージに抵抗し、試験ポイコットを指令、九月二十五日法政大学、二十九日東京大学教養学部、十月二日早稲田大学などが突入、揺れに揺れ動く時代であった。

近忠さんのゼミは、いつも激しく時代を撃つ弁舌で始まる。しかし、そのあと西鶴・近松文学の世界に入るや、精緻な実証性に基づくレクチャーにかわっていった。私はそこに歴史社会学派を起こした、動と静の学者魂をみた思いがする。温かい先生であった。

片岡さんの和服で、本を入れた風呂敷包みを抱える姿が浮かんでくる。私はゼミで不適切な発言をなし、「自我史観」に立つ、曖昧さを微塵し許さぬ先生のきつい怒りがあった。だから（先生の論を展開する時の独特な口調）、私には怖い存在であった。だが、学生運動に対して悩み苦しんだ時、もつとも教えを乞いたいと思ったのは、ほかならぬ一番恐れていた片岡さんだった。大著『近代日本の作家と作品』（岩波書店 第六刷）、『片岡良一著作集』（中央公論社）などの著作に、いまだじっと見詰められている気がしてならない。

西尾実先生、重友毅先生、永積安明先生、西郷信綱先生の講義は、われわれにはなかった。もっぱら著書によって学風にひきつけられ、受けた教えは大きい。特にも私は、それぞれの先生の文体にすっかり虜となった。しばらく後、西郷先生の著書が朝日新聞の「文芸時

評」にとりあげられた時は、納得もし、かつ衝撃も受けた。

休職中の小田切秀雄先生が、研究室に顔を出されたことがあった。その姿は、私には眩しかった。文芸詩などで知った小田切秀雄の名は、鮮烈な魅力を湛えていたからである。その小田切先生に、私は今に至るも厚い指導をいただくことになる。そして、その中で啄木と万年山宝徳寺の因縁を、心に醸成していくことになる。

一九六七年、『啄木全集』（筑摩書房）が、小田切先生と日本大学の岩城之徳先生を中心に編集、刊行された。精妙な本文批評を指す、画期的な啄木全集であった。その第八巻の『啄木研究』に、新進研究者として相馬庸郎、今井泰子とともに私も選ばれ、小論「啄木伝覚え書」を載せていただくことになる。このことは、私にとって大きな契機であった。

点描したに過ぎないが、法政大学日本文学科は、大きな血脈をもつ運動体であったように思う。それはまちがいがなく、文学の発見と創造の精神で貫かれた道を造っていった。小さな存在でしかない学生の私も、その中で育ち、今あると思っている。

一九八九年（平成一）十二月二日、東京において、国際啄木学会の設立を宣言、会長に岩城之徳日本大学教授を選出、会長より副会長に上田博立命館大学教授、事務局長に私が委嘱された。そして、第一回大会を盛岡大学にて開催することを決定する。翌一九九〇年七月、設立記念盛岡大会は「国際交流時代の啄木研究はいかにあるべきか」をメインテーマに、盛岡大学において開催された。私は因縁を思った。

かくて、盛岡大学での盛岡大会、台湾・淡江大学での台北大会、立命館大学での京都大会、函館大沼国際セミナーハウスの北海道大

会、明治大学での東京大会を、それぞれのメインテーマをもって開催し、成果を挙げ、歴史を築いた。続く大会は、韓国・ソウル大会として一九九五年八月十八日から三日間、中央大学校で開催することだった。海外での大会は、台湾の台北大会につぐものであり、準備を慎重に進めた。特に戦後五十年、韓国解放の歴史的記念の年、月に催すからである。

だが、海外での学術会議をもっとも望まれた岩城会長は、その頃から入院を繰り返して、韓国ソウル大会の直前の八月三日、心不全のために逝去されたのである。痛哭の極み、無念、自失。しかし、この時にあつてなすべきことは一つしかない。岩城会長の遺志を継承し、大会を成功させることだった。

学会は韓国支部を中心に結集した。過去の歴史から目を離さず、韓国の研究者と日本の研究者は、お互いに相手の心を思った。そして、遂に学術的な国際交流を果たし、研究の成果も豊かに挙げることができた。それを可能ならしめたものは、会員すべてが念頭から離さなかつた岩城会長の遺志である。敢えて言うならもう一つ、啄木文学を核にしての絆であった。

いま、十月十一日からの国際啄木学会済民大会の準備の最中にある。啄木生誕百十年の年、玉山村の招致を受け、「啄木文学の原風景」をメインテーマに、その大会を岩城之徳先生にかわって私は営まねばならない。ロシア、アメリカ、インドネシア、ブラジル、台湾、韓国の研究者と共に。これもまた、啄木と万年山宝徳寺の因縁のなせるわざであろう――。

（ゆうぎ しょうご 国際啄木学会会長・一九五一年卒）